大手前大学論集　第12号（２０１１）109―128頁

藤村の「初恋」と伊勢物語

松原秀江

要旨

「初恋」の詩の中の言葉を手がかりに、この詩は『伊勢物語』を下敷にしていること、そしてまたそのことから、その初恋の相手は、幼訓染の大脇ゆうではなく、明治女学校での教え子・佐藤輔子であることを述べた。

キーワード：伊勢物語幼馴染の恋・二条の后・伊勢の斎宮、大脇ゆう、佐藤輔子、ラブの翻訳語としての恋愛、キリスト教、林檎

一

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の木の下に
おのづからなる細道は

誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

云わずと知れた島崎藤村の「初恋」である。この恋の相手は、藤村と同い年の幼友だち、ゆふ（勇）だと云われている。[1] ゆふは島崎家の隣家、酒造りと金融業を家業にする大黒屋・大脇信常の長女。そしてその大黒屋は、代々宿役人を勤め、藩侯御目見や苗字帯刀も許されて、最盛期を迎えた十代目の信興（信常の父、勇の祖父）には、「大黒屋日記」で有名な自筆の「年内諸用日記」があり、「馬籠古駅」の様子を眼前に見るように伝えるこの日記が、『夜明け前』執筆の藤村に多大な自信を与え、父・正樹を主人公にするこの小説で、信興も信常も伏見屋金兵衛・伊之助として登場することはよく知られている。そして当時、「近隣屈指の地位を確立」していた大脇家は、中山道馬籠宿の本陣・問屋・庄屋を兼ねる名家だった島崎家とは、「極く懇意で」、「風呂でも立つと」「互に提灯つけて通ふほどの間柄」だった（『生ひ立ちの記―或る婦人に興ふる手紙―』）という。

従って、手習の為に正樹のもとに通ってもいたゆふと藤村（春樹）は仲がよく、谷川で「腕まくり」に「裾からげ」で鰍すくいなどし、「女といふものに初めて子供らしい情熱を感じ」た（傍点筆者。以下同じ）春樹が、ふとゆふを「堅く抱締めたこと」もあったらしい。だが、「この子供らしさは、近所の他の娘にも起り」（同上）、妻籠奥谷（つまごおくや）に嫁に行ったおゆふは、藤村の死後、

春さんが、林檎が欲しいというので、ちぎってやったが、あんなことを考えていたとは、ほんとにまあ早熟な……

と、「七十二歳の穏やかな顔で笑ってみせた」と、「木曾馬籠『[2]』には記されている。ゆふの甥になる文平（大脇家十三代目）も、

『初恋』の思い出といふものは、お聞きになってますか

と聞かれ、

当人には、……べ、べつにどうということも、なか、なかったようです

と、「幼児のように可愛」い笑顔で、「ニッと笑った」と伝えられている。ゆふその人も会ってみると、「藤村と通じる何かが感じられ」る「きわめて控え目な話しぶりで」、

礼儀正しい応接の態度は、最後まで少しもくずれなかった。

という。

「初恋」のモデル（ヒロイン）と考えられてきたゆふは、藤村記念堂建築など、何の報酬も期待せずに成し遂げた「ふるさと友の会」の人達に、「おゆふさま」と呼ばれ、元は島崎家のものだったにもかかわらず、島崎家没落の過程で大黒屋、即ち大脇文平の所有（もの）になっていた隠居所（藤村の祖母が住んだ。彼女は「相応に名のある家から嫁いで」来ていた）に、時々妻籠から来て住むこともあったようだが、「隣りの石垣の上」の、「高い壁が月に映（あた）って見える」家に育ったゆふとの幼い恋を、藤村は『生い立ちの記』の中で、次のようにも記している。

何時の間にか私はこの隣の家の娘と二人ぎり隠れるやうな場所を探すやうに成りました。私達は桑畠の間にある林檎の樹の下を歩き又は玄関から細長い廂風の小座敷を通り抜けて、上段の間の横手に坪庭の梨の見えるところへ行きました。すると極りで、若い嫂が私達を探しに来ました。

と。

二

この部分が、現実よりも文学に価値をおく、藤村の手になる『生い立ちの記』のこの部分が、事実にかなり忠実に書かれたとしても、事実そのものであるかどうか、それはわからない。だが傍線部分に注目するなら、これまで云われてこなかったことが、見えてくるのではなかろうか。

というのも、「元禄の大家が明治の代に復活（いきかへ）り（『春』四）、紅葉や露伴が「西鶴張りの文体で小説を書き人気を博した」[3]頃、即ち明治二十年代、『桜の実の熟する時』の足立（モデルは、『文学界』同人、馬場孤蝶と云われる）の蔵書の中に、『一代女』があったように、藤村も西鶴を読み、『一代女』だけでなく、[4]『五人女』にも注目していたと思われる。たとえば『若菜集』の「六人の処女」「おきく」の中で、

お七はこひの

ために焼け
高尾はこひの
ために果つ

などと歌うように。勿論、東京に出て来た春樹（藤村）が、身を寄せた同郷の恩人・吉村忠道らと共に、しば〳〵芝居を見ていたとしても。

そのお七の恋物語は、『五人女』巻四に「恋草からげし八百屋物語」として記されている。そしてこの巻全五章はすべて、『伊勢物語』初段から第五段まで「順序を変えずにとり合わせて構想化した」作品であると、既に指摘されている。(5)

がここでは先ず、『生い立ちの記』の傍線部分の特に「嫂」の語に注意して、『五人女』巻一「姿姫路清十郎物語」の、お夏と手代・清十郎の恋を監視する「兄嫁」が、次のように描かれている（一の二）ことに注目しておこう。

やう〳〵聲を聞あひけるを楽しみに、命は物種（ものだね）、此戀草のいつぞはなびきあへる事もと、心の通ひぢに、兄嫁の關を据へ、毎夜の事を油斷なく、中戸をさし、火用心めしあはせの車の音、神鳴よりは恐ろし、

と。この所の傍点部分は、二条の后と業平の恋を描く『伊勢物語』第五段と無関係ではないだろう。全文あげてみよう。

むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえ入らで　わらはべの踏みあけたるついぢの崩れより通ひけり。人しげくもあらねど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に夜ごとに人をすゑて守らせければ、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななむ

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。二条の后に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄たちの守らせたまひけるとぞ。

いささか長くなるのも厭わず、全文記したのは、「初恋」について、

第四連は現時点からの回想であるが、その想像は「伊勢物語」の〈築地の崩れより通〉った男の一段の連想であろう。第三連を除けば、初恋といふ題にふさわしい雅醇な恋愛詩である。

といった指摘[6]があるからである。「初恋」第四連三行目の傍に○印をつけた「踏み」も、『伊勢物語』第五段の「踏み」からの連想だろうか。

更に右の文の、

初恋といふ題にふさわしい雅醇な恋愛詩である。

の傍点部分に注目するなら、誰しも『伊勢物語』第二十三段、筒井筒の幼馴染の恋を思わずにはいないだろう。そして「初恋」第一連冒頭部分の、

まだあげ初めし前髪の

は、『伊勢物語』のこの段の、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

の歌に重なっていると思うに違いない。そもそもこの段は、樋口一葉の名作『たけくらべ』の題そのものの拠り所でもあった。少女の右の歌を導き出した幼馴染の少年の歌、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

の○点を傍に付けた部分に、少女の返歌の同じ部分を足せば、一葉の名作の題名になる。一葉は平田禿木に借りて、上巻に『五人女』の載る帝国文庫第二十四編・二十五編の『訂校西鶴全集』上下巻（明治二十七年五月・六月博文館　尾崎紅葉・渡部乙羽校訂）を読み、鷗外が『三人冗語』で、

お七が吉三のとげをぬきてやる前人の藍本もあるべく

と評した『たけくらべ』を書いている。[7]その禿木らと『文学界』を創刊した藤村は、『文学界』に発表される『たけくらべ』（明28・1～29・1）に「早くから注目し」、『文学界』の編集・経営にもあたった星野天知に、三月四日付書簡で、

今月の「文学界」兄が枕頭にありと存候。（中略）一葉子の筆力ます〳〵新らしく、實におそるべき秀才と存候

と書き送っていた。同い年の一葉の作家としての存在が、透谷亡き後の藤村を刺激し、一気に「詩への関心」と「意義」を高めた藤村は、

「『若菜集』（明30・8）で新体詩史上初めての到達と栄光を獲得すると共に」、『たけくらべ』の「一葉と同じく」『文学界』の枠を越え、一躍「時代の寵児」になったと云われている。[8]

のみならず、「平家一門の落ち武者」かとも云われ、永正十年（一五一三）相州（神奈川県）から木曾に移って木曾氏に仕え、元禄元年（一五五八）には馬籠に移りやがて郷士になって、享保年間には、村でも「もっとも大きな百姓」になり、[9]既に見たような名家になっていた島崎家の十七代目が、藤村の父・正樹だった。正樹は国学を学ぶと共に和歌もよくし、江戸と京都をつなぐ東山道、即ち木曾路の西よりの「最初の入口」（『夜明け前』序の章）だった馬籠が、和宮御降嫁の大行列（一八六一）や、明治天皇の行幸（一八六九）も拝することのできる土地柄であれば、そんな街道筋の本陣・問屋・庄屋の家に嫁いだ祖母や母の嫁入本の中には、江戸時代は勿論中世から、和歌をたしなむ者（和歌は女性の必須の教養とされた）には、欠かせない歌書の一つとされた『伊勢物語』[10]があり、針仕事をする母や嫂のそばで、「武者絵の敷写しなど」していた（『生ひ立ちの記』）幼い春樹（藤村）は、平仮名で書かれた『伊勢物語』を見たり、絵解きされることがあったかもしれない。

そんなことを考えながら「初恋」を読むと、第四連、

林檎畑の木の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

には、「踏み」にだけでなく「問ひたまふ」にも、『伊勢物語』の面影を見ることができるように思われる。父親が「この地域きっての財産家、地主」[9]で、経済的には豊かでも、幾分家格の低い隣家のしかも同い年のゆふに、敬語「たまふ」は不自然だろう。また藤村の自伝体長編小説、

他の長篇『春』などに比べて虚構が少なく、かなり事実に即して語られている[11]

などと云われる『桜の実の熟する時』には、「お伽話」のような幼少年期を振り返り、次のようにも記されている。即ち、

「わたし」と言うかわりに女でも「おれ」と言い、「捨さん」と呼ぶかわりに「捨さま」と呼ぶような、子供の時分から聞き慣れた可懐（なつか）しい言葉の話される世界の方へと帰って行った。

と。自らを「おれ」と云う少女のモデルはゆふ、そして「捨さま」は岸本捨吉、即ち藤村（春樹）である。

だが、「芥川」の名で知られる『伊勢物語』第六段を、第四連に重ねて読むならどうだろう。第六段には、二条の后への恋の挫折に泣く業平の姿が描かれる。しかも二条の后を盗み出して、雨の中芥川まで背負って逃げる業平の姿は、嵯峨本以来『伊勢物語』のこの段の挿絵になり、他の挿絵同様版が異っても、その構図はほとんどそのまま引き継がれ、大和絵や文箱の蓋にも描かれただけでなく、『五人女』巻三では、大経師の恋女房・おさんを背負って逃げる手代・茂右衛門の挿絵（三の四）の構図にもなり、浮世絵に描かれる女の着物の模様にもなる程、江戸時代を通して親まれ愛されてきた。この段は業平の次の一首、

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを

を境に、どこにでもいる男と女の普遍的な恋物語として語る虚構の前半と、史実（伝説？）として実名入りで語る後半に分かれ、後半この話は、二条の后がまだ若く、入内前に清和天皇の后としての行儀見習などのため、「いとこ」即ち文徳天皇の女御で、清和天皇の生母である染殿后に仕えていた折の、業平の恋物語だと述べている。とすれば「初恋」第四連の「問ひたまふ」女性のモデルは、幼馴染のわずか八歳のゆふ（勇）よりも、藤村の明治女学校での教え子、佐藤輔子こそがふさわしいのではなかろうか。輔子は南部藩士でのち衆議院議員になる佐藤昌蔵の娘[3]、藤村より一つ年上で、しかも「早くから義母鹿討家の長男・豊太郎と婚約の間がら[6]」だった。

三

ところで明治二十五年二十一歳の藤村は、星野天地の世話で、明治女学校高等科の英語・英文学の教師になっていた。だが翌年、思いも寄らず教え子、輔子を愛した悩みと、「教師として行塞（づま）った」（『桜の実の熟する頃』十一）自責の念から退職し、教会にも退会届を出して、何もかも失い、関西漂泊の旅に出る。前年九月には既に、古里・馬籠の旧本陣の宅地・家敷も、大黒屋に売却されていた。その「寂しい」

（『春』八）尾羽打ち枯らした姿は、

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。

（第九段）

と記される「むかし、男」業平に、旅の方向は逆だが、ほとんど同じだろう。没落する家を挽回すべく、わずか十歳で上京した藤村は、身を寄せる恩人・吉村忠道の家族と共に、大川端に転居したのは、十五歳の折である。ちょっと出れば「眼前に在る」（『春』五十一）大川即ち、隅田川をながめる時、

名にしおははいざこと問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしや

と詠んだ業平の胸中を、輔子を愛するようになってからは尚更のこと、藤村はひそかに想うことがあったのではなかろうか。

だが、「寡黙」な藤村の輔子への想いは、「其純情さに泣かされた」天知によって、彼女に伝えられる。[12] そして最初の自伝小説『春』によれば、「行くところまで行って見なければ承知しない男」・藤村は、西行・芭蕉（後述）の跡を慕って、漂泊の旅に出たにもかかわらず、経済的にも困窮して悄然と帰った翌年、戸川秋骨の計いで輔子に会っている。「夢寐にも忘れなかった」勝子（輔子）との再会の「その夢のような日」と、『春』には記している。「勝子は人力車でやって来た」とも。「許されて逢いに来た人ではないらしい」とも、そしてまた次のようにも。

勝子は今岸本（藤村）の前にいる。もし来たらああ言おうかしらん、こう言おうかしらん、と種々聞いて見たいことや話したいことなぞ考えて置いたが、さて逢って見ると、岸本は思うように話すことも出来なかった。こうして長く居ることは事情が許さないという風で、何となく勝子は沈着かないように見える。それに、一度師弟の関係があったということは、自由な談話を妨げた。このあわただしい邂逅の間にも二人は礼義を失うまいとした。（中略）彼は八戸の酒屋の名を認めたものを勝子に渡したりなぞして、復機会があったら、と再会を約したが、心には許婚のある人に逢って話をするということのこれが最初でも有り又最終でも有るかのような気がした。勝子は別離を告げて出た。

と。傍点に注目するなら、この部分は『伊勢物語』の書名の拠り所にもなったと云われる六十九段、業平と伊勢の斎宮との哀切な一夜の逢

瀬に、何と似ていることだろう。昼と夜、許嫁のある教え子と、神に仕える斎宮との違いはあるが、女の方からやって来ること、話しらしい話もしないうちに、時間だけが流れ去ってしまうこと、再会を約束しながら、二度と逢えなかった（逢えないと思った）こと、そしてそれ故にこそ、忘れられない印象を残して「夢のような」こととして語られることが、そっくりである。

もっとも、岸本は次第に「前後を顧みな」く成り、勝子も「最早師弟の関係を忘れ」、「純直な、可憐な胸」の内を吐露して、彼は「実意の籠った手紙」を受け取ったと、『春』には記している。だがそれも少し時間をずらせば、翌朝斎宮が寄こした和歌に、業平が返歌したことにほとんど同じだろう。勿論その後又、「縁のない」（『春』四十九）二人は、戸川秋骨の計いで再会している。がしかし、その時も「二人は顔を合せた」だけで、「復々言いたいことも言わずに別れて了った」（『春』七十一）。それだけではない。ともに心に深い傷を残して、以前岸本が、「死ぬかもしれない」と案じた通り、輔子はやがて亡くなり、二人は業平と斎宮のように、永遠に別れてしまう。この間の事情を、天知は次のように述べている。

同情に堪へず、密かに本人輔子へ漏らしたのは悪い老婆心であったと後悔している。輔子の家庭は封建時代の士風其儘で、既に親の取極めた許嫁もあり、当人の本性も堅実で柔順であるから、油然と湧き起る情熱と苦闘は正視するに忍びなかった。到頭苦悶の結果、心を想ふ人へ身を許婚の人へ、と断言して鹿討氏となり、続いて姙娠中に他界へ逝つて仕舞つた。私は実に泣かされた。[12]

と。

輔子は、「静かに落付いて対象を見定め、真実を理解する素直な理性の持主」だったようだ。薙刀や柔術を「熱心」に修め、道徳的にも毅然とした人柄で、「いつも自分に省みて忍耐に終る」ことの多い女性だったらしい。[6] 従ってそんな彼女は、「おとなしく」卒業の翌年、「親の意のままに」、札幌農学校（現北海道大学）の講師だった「親切な、心のよい」許嫁の豊太郎に嫁ぐが、「まもなく激しい悪阻に苦しみ」、札幌で急逝してしまう。輔子と共に明治女学校で学んだ相馬黒光は、『黙移―明治・大正文学史回想』の中で、次のように云っている。

お輔さんは良家の娘として、いかにも典型的なところがあり、（中略）魂のみに自由を握り、現実は放棄した形になって、おとなしく許嫁の鹿内さんに嫁ぎました。

でもその諦めの結婚はお輔さんを生かすものとはならないで、じきにあのいたましい死が優しい彼女を襲いました。お輔さんの死が

悪阻のためということになっており、また実際ひどい悪阻であったのには違いありませんけれど、生理的なその苦痛に堪えられなかったものは、やはりあの人の魂であると思います。

と。彼女は「ただ一筋に」藤村を想い、「恋人と許婚の間に身をおいて苦悶し」、「別れぎわに」「とりかわした」ハンカチで、藤村の写真を包み、「いつも懐に入れていた」という。とすれば輔子に死なれて「可恐しい打撃を受け」大川端で輔子を想い、益々「無口」に成るばかりだったと、記さずにはいられなかった藤村にとって、輔子のこのような「魂の美しさ」・「優し」さが、思ってもみなかった悲劇的な二人の恋のたゆたいと「ためいき」になり、後に仙台で「心の宿の宮城野よ」と歌う藤村の、「全力を出して事業をして見たい」（『春』百六）と願うその心の中で、「初恋」第三連の叙情豊かな調べになったと、云ってよいだろうか。天地も藤村が、

忽ち佐藤輔子の眼に魅せられて、

と記しているように、「魂」の美しい彼女は、「やや大きすぎるくらい」の「ぱっちりとしたうるおいのある」「可憐な眼付」の、「姉」のように優しい女性だった。しかも黒光が、

お輔さんは花巻の生れで、雪国の人らしくほんとに色が白く、頬がさくら色をして、

と云っている、その傍点部分に注目するなら、「初恋」第二連の「白き手」や「薄紅」、そしてまた「あたへし」の語の発想の源も、自ら明らかだろう。黒光が「『若菜集』のようなやさしい抒情詩」を読むと、

私はまたあの佐藤お輔さんの面影をしのび、あの藤村さんはあの方を失ってこの詩を得られた、これは恋と引きかえの詩だ

と思った通りだと思われる。『春』の一節（六十八）に、お勝の妹・お豊が、

まだ前髪を額のところへ切下げているほど若かった

と記されていることに注目すれば、「初恋」第一連第一行の髪型が、八歳程の童女のものではないことも明らかだろう。

そしてこの思春期のまっただ中にいる二人の哀切極まりない恋は、明治になり西洋化・近代化が叫ばれ、西洋の文物が流れ込み、新しいものに敏感な純粋で知的な青年たちが、カーライルやエマアソン・ティーヌなど「外国の文学」に熱狂し、それまでは見たことも聞いたこともない「大きな世界」に気づき、憧れ始めたにもかかわらず、一般的には精神的にも文化的にも、まだ江戸時代にすぎなかった、明治二

十年代の青年たちの悲劇だったろう。『桜の実の熟する時』には、生家の衰運を挽回すべく、東京に出て来た捨吉（藤村）が、「厳格」で「アーメン嫌いな人達」との「下町風」の生活の中で、理解されず苦しむ孤独な姿が描かれている。彼はキリスト教の洗礼を受けても、馬籠から上京してきた母親にさえ、「わからないから」と何も云わない。だがしかし輔子の場合、異母兄が米国の大学を卒業し、札幌農学校の校長（北海道大学の総長）にもなったキリスト者だったように、熱心なキリスト者の多い佐藤家の娘として、敬虔なキリスト教の信者だった。盛岡生れの彼女が、東京の明治女学校で学んだのも、その新時代にふさわしいハイカラなキリスト教主義の教育が目的だったろう。

のみならず、当時の知的な青年たちが女性も巻き込み、どんなに新しい「学問」に憧がれ、互に熱心に学んだか、教師になった捨吉（藤村）や、生徒だった黒光の側からみてみよう。たとえば次のように記されている。

・初めて見る教員室の前から、二階の教室の方へ通う階段の下あたりへかけて、長い廊下の間は思い思いに娘らしい髪を束ね競って新しい教育を受けようとしているような生徒らの爽かな生気で満たされた。

（『桜の実の熟する時』十一）

・先生はみな二十代の若さで、清純で、厳粛に人生を凝視するというしっかりした人物が揃うているのでしたから、教えるものと教えられるものとがぴったりしていて、その間におのずから何を学ぶかという目的が定まる。学問と人との間にいささかの間隙もないのでした。

（『黙移―明治・大正文学史回想』）

などと。のみならず、というより、だからこそというべきだろうか。たとえば『春』（二十）には、次のような部分がある。

若主人の清之助は市川と同じく高等学校へ通っていたが、その日は帰宅がすこし遅くなるとやらで、母親が出て岸本を款待た。涼子も出て話した。涼子は（中略）可惜いことには身体が弱かったが、弱い位だから世の中の歓しいや哀しいも早く解って、怜悧な、考え深い容貌をしている。普通の女に見せようとして、深く才気を隠しているようなところもあった。第一、兄さんのお仕事が違う、と連中はよくそれを言った。伝馬町というのはこの人のことで、二人の兄の事業に同情を寄せているのみならず、連中の書いたものまでも熱心に読んでいる。涼子といい、峰子といい、勝子といい――まだ他に青森という人もあったが――連中の後にはこういう姉妹のような若い人々が居て、健気にも彼らを助けようとしたり、あるいは愛慕を捧げ、同情を寄せ、すくなくとも彼等の精神に近こうとしたものである。殊に涼子は市川贔負であった。

などと。岸本及び勝子を除けば清之助は星野天知の弟夕影、市川は平田禿木、そして涼子は、星野兄弟の妹・勇子、峰子は広瀬津禰（関西放浪中、藤村が世話になった）、青森は松井万（幸せな結婚をした後の星野天知夫人）がモデルである。明治二十年代のロマン主義運動の拠点になった『文学界』同人の周りには、純真な彼らの仕事に「同情を寄せ」、「助けよう」と「愛慕を捧げ」、「彼等の精神に近こう」と、「書いたものまで熱心に読んでいる」「姉妹」のような「若い」女性たちがいた。

にもかかわらず、

女の子を教えるというのが、あたいには少し気に入らない

などと世話になっている恩人の家族に云われ、「女の子」に教えに行くことが、ことさら「女の子」に近づくようで、「辛い」と思わなければならないような時代だった。そんな中で「学芸」への「愛慕」から、「できるだけのこと」はしようと決意し、「あまり熱心に」「教え過ぎて」、「教える資本が無いかのように」危惧したことが、藤村の女学校を退職する理由の一つだった（『桜の実の熟する時』十二）としたら、それも、

麺麭は天にあり　（『春』一）

と、「踏出した一筋の細道」（『桜の実の熟する時』十一）を、「馬車馬」のように「仙」る、「あまり」にも「熱心」で正直な青年藤村の姿以外の何ものでもなかったろう。

だが、輔子は『桜の実の熟する時』の勝子のように、「どちらかと言えば学問は出来ない方」だったのかもしれない。とはいっても、

・一学期の間の成績から押して見ると、いかなる学課も人に劣るまいとするような気象の勝った生徒ではないらしかった。

・女としての末頼もしさと、無器用とが、彼女には殆ど同時にあった。

と記されるこれらの文に注目するなら、同じ小説の中の「かがやいたその眸。白い、処女らしいその手」とも相まって、それは「花巻」という田舎生まれの「良家の娘」の足るを知った純朴さ・やさしさ（それらは、幕末から明治にかけて日本に来た外国人が、驚き絶賛した日本人の特色でもあった）[13]を、余す所なく伝え、頼るものは何もないまま、木曽の山奥から出てきた正直で、おそらく「無器用」だったに違いない藤村の憧れの女性として、彼女がいかにもふさわしいように思われてくる。そしてまた「女としての末頼もしさ」は、生み育てる性とし

ての「忍耐」強さにつながり、彼女が「封建時代の士風其儘」の家庭に育ち、薙刀や柔術を「熱心」に修めていたのなら、勝ち負けを云々するより、身を守ることだけに徹し、人と人との間に生きる人間としての道を学んでいたに違いなく、「士風」の中の主君への忠誠は、そのまま神への忠誠になって、彼女はどんな艱難辛苦にも、愚鈍なまでに背筋を伸ばし、「毅然」と耐え抜こうとする女性だったのではなかろうか。

現在「恋愛」は、万葉の頃からの言葉のように使い古されているが、『春』にも「ラブ」（十七）、「ラバア」（八十一）などとあるように、この言葉はloveの翻訳語として、「愛」とともに明治以降一般的に使われるようになった。そして藤村も、

愛――という言葉は殊に多く基督教會に繰り返される言葉である。

（『新片町より』）

と云うように、仏教では「執着」や「貪り」の意味合いが強く、笑いの対象でしかなかったこの言葉が、肯定的な意味に転じるのは、「まさに聖書の翻訳が契機」だったと指摘されている。[14] しかも、江戸時代以来の娼妓・芸妓を対象にする色恋の世界を嫌い、

キリスト者のみならず、明治の知識人が広く「愛」の理想に取り込まれていったのは、「愛」が男女平等な「文明」社会を実現してくれる、と期待されたからでもあった。「景慕」（逍遙）「敬愛」（巌本）と、「愛」の条件として〝相手に対する尊敬〟の念が不可欠な要素として含まれていたのは、特に女性に対する尊敬を促す目的があった。[14]

というのであれば、明治女学校の存在は、無視することなどできない程、大きかったと云わねばならない。この女学校を母体に、『文学界』誕生の起縁にもなったキリスト教系の啓蒙雑誌『女学雑誌』が出され、その主筆だった巌本善治は、ここの教頭から校長にもなり、「愛」の提唱者たちの中心的人物でもあったから。たとえば『桜の実の熟する時』（九）には、次のように描かれている。即ち、

「嘉代さん」

と主人（吉本さん、巌本善治がモデル）が細君（若松賤子がモデル）を呼ぶにも友達のように親しげなのは、基督教徒風の家庭の光景らしい。細君は束ねた髪に紅い薔薇の蕾を挿しているような人で、茶盆を持ってテエブルの側へ来た。その時吉本さんの紹介で、捨吉（藤村がモデル）はこのバアネット女史の作物の訳者として世に知られた婦人をも初めて知った。

などと。『小公子』『小公女』『秘密の花園』の翻訳者として評判になり、古い桜にかわり、新しい時代の象徴である薔薇を、しかもその紅

い蕾を髪に飾り、この時代の幸せと栄光を、まるで絵にしたようなこの人は、肺結核のため早世するが、愛・恋愛には、「真正の愛」「神聖なる恋愛」などといった言葉があるように、金銭で自由になる芸娼妓を対象にする色恋を嫌い、恋愛からその芸娼妓に深くかかわる身体性が抜け落ち、精神性（霊性）が優位になって、プラトニック・ラブへと進めば、それはたとえば、黒光の次のような言葉にもなるだろう。

恋愛というものは決して実行に移してはならない、ただわが心に深く秘めて、あくまでその清純を護るべきであるとし、精神的には超越しても実生活には多くの疑問をのこしていたのが、その時代の恋愛人の心理ともいいましょうか　（『黙移―明治・大正文学史回想』）

などと。輔子が「苦悶の結果、心を想ふ人へ身を許婚の人へと、断言して鹿討氏となり」、やがて亡くなってしまうのも、このような背景があってのことだった。

四

そしてこれも、文化的・精神的には未だ江戸時代のまま、西洋化・近代化を急いだ明治時代の悲劇的な一面と思われるが、「初恋」に歌われる「林檎」についても見てみよう。

「林檎」は『本草和名』（九一八頃）にも見られ、江戸時代になると、中国伝来の「花紅」を中心に、広く栽培されていたらしい。

そこに、当初オオリンゴと呼ばれる西洋リンゴが流入、大ぶりで味もよかったため、従来のリンゴを圧倒して、ほどなくリンゴといえば西洋リンゴの方をさすようになった。

と云われている。[16] 藤一也は、『図説日本文化地理大系』中部Ⅰ・『日本地誌』11により、西洋種の林檎が日本に入ったのは文久年間、本格的な導入は明治五年で、信州のりんご栽培は明治七年に始まるが、

全般的にみて大正期までのりんご作は養蚕に圧倒されて、主要作物の地位を得ることができず、若干の篤農家が興味をもち、栽培するにすぎなかった。

と述べ、

藤村の馬籠のある木曾地域では林業についてふれるところはあっても、林檎についてはない。

と述べて、藤村のゆふとの初恋の時点（明治十二年あるいは十三年）[17]で、林檎の樹が「馬籠にあったとは考えられない」と断言している。[18]

『桜の実の熟する時』（六）にも、『生ひ立ちの記』などに記される幼い頃の初恋の場面が、

その娘（隣の家の娘）の腕まくり、裾からげで、子供らしい淡紅色（ときいろ）の腰巻まで出して、一緒に石の間に隠れている鰍（かじか）を追い廻した細い谷川の方へ帰って行った。生れて初めて女というものに子供らしい情熱を感じたその娘と一緒に、よく青い蓆（へた）の附いた実の落ちたのを捨って歩いた裏庭の土蔵の前の柿の木の下の方へ帰って行った。

と回想されるが、そこにも「林檎の樹」はない。だが、藤一也は、

「初恋」を書いた明治二十九年の仙台では、林檎栽培は既に普及していた。

と書き添えてもいる。

明治二十九年は、藤村が東北学院の作文教師として、仙台に単身赴任した年である。秋骨の計らいで輔子に会ったのは、二年前の明治二十七年二月、四月以降再び明治女学校で教え始め、翌年五月に結婚した輔子が、八月にははや病死してしまったからだろうか、藤村は十二月に明治女学校を退職している。また九月には、馬籠大火のため旧本陣を焼失、隠居所が残っただけだった。そしてその翌年、赴任の年の二月には、思い出の多い明治女学校まで、火事で失っている。大切なものを根こそぎ失い、輔子との再会後、彼女への様々な想いを、東京で身を寄せていた「大川端」でのこととして、『春』に記す藤村は、「身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ」と、「あづまの方」に都落ちしたのだろうか。『飯倉だより』の「文学を志した頃」には、

仙台へ私は寂しい旅をした

と記している。

そして彼が何もかも失い、時には自殺もしかねない程、[19]「寂しい旅」に出なければならなかったのは、馬籠から近代化・西洋化の実験場だった東京に出て来て、それまでは知るよしもなかったキリスト教を核にする西欧の文物や、江戸時代には「いたずら」として許されなかった恋愛などの「禁断の木の実」に触れてしまったからである。ここでは特に、その「キリスト教の伝統」では、アダムとエバがエデン

の園で食べた「禁じられた果実」を、「リンゴと表象する」ことの多い[20]ことに、注目しておこう。ヨーロッパでは、林檎は代表的な果実だったらしく、絵にもそれらしく描かれてきた。のみならず旧約聖書雅歌第二章で林檎は、

若者たちの中にいるわたしの恋しい人は、
森の中に立つりんごの木。
わたしはその木陰を慕って座り
甘い実を口にふくみました。

などと愛の象徴として使われ、第七章では、

なつめやしの木に登り
甘い実の房をつかんでみたい。
わたしの願いは
ぶどうの房のようなあなたの乳房
りんごの香りのようなあなたの息

などとあることも[21]。というのもとすれば、四行四連の「初恋」の詩の中で、唯一「林檎」の語のない第三連、

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

も、林檎と無関係でないこと、そしてまたこの詩全体が聖書のこれらの部分に、微妙にしかし深くかかわることがわかるからである。そしてこの詩は、林檎の甘酸っぱい生き返るような清純な味と薫りと共に、「し」という言葉の繰り返しで、既にもう過去のものになってしまった、はかない可憐な林檎の花のような「ういういしい処女の恋心」や「清らかな青年の情熱」が、吉田精一の云うように[22]、寡黙な藤村

にふさわしい「つつましやかな表現」のリズムに乗って、包みきれない「深いなげきや歎息」のようにもれ出て、『伊勢物語』以来の「恋のあわれ」、ものの哀れを、読者にしみじみと余すところなく語りかけずにはいないだろう。

明治二十九年、輔子も古里の代々続いた屋敷も失って、「東北の古い静かな都会」仙台に、「拙き」「身をわび」（『一葉集』）「乞食巡礼」（『おくのほそ道』）のような旅を続ける芭蕉の跡を追うように、そしてまたその芭蕉の「書き遺したものにも隠れた情熱の香気のあることを想像し」ながら（『桜の実の熟する時』十一）[23]、流れて行った藤村は、

私の生涯はそこへ行って初めて夜が明けたやうな気がした。

（『藤村詩集』合本第十六版の序）

と述べている。一年程滞在したこの「仙台の客舎」で、ほそぼそと詩を書き、「毎月東京へ送つて」、「雑誌『文学界』に載せ」、「それを集めて公にしたのが、文学に無関心でない日本人なら、誰もが知っている業平像の重なる「初恋」を著名にした第一詩集『若菜集』（明30・8刊）だった。後にこの詩集に、『一葉集』（明31・6刊）・『夏草』（明31・12刊）・『落梅集』（明34・8刊）を合わせて、『藤村詩集』（明37・9刊）として刊行したその時の序に、

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

と高らかに宣言して、藤村は、

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。

伝説はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を飾れり。

と宣べている。そしてこの部分に、同じ序の次の部分、

生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

を合わせて読むなら、

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

と宣言した藤村の万感の想いに、深く共感せずにはいられないだろう。そしてまた、改めていうまでもない陳腐なことながら、新しいものの創造には、「民俗」「伝説」までなっているような誰もが知っている旧いものの力が、いかに大きいか、改めて思い知らされるのである。

〈注〉

（1）伊東一夫編『島崎藤村事典』（明治書院）など。

（2）菊池重三郎著　中央公論美術出版

（3）『春』注解（新潮文庫）

（4）『桜の実の熟する時』五には次のようにある。

捨吉は窓に近く造りつけてある書架の前へ行って立って見た。何気なく足立の蔵書を覗くと、若い明治の代に翻刻されたばかりの「一代女」が入れてある。古い珍本から模刻したというその挿画のめずらしい元禄風俗や（中略）それからあの皆なの褒める○○の多い西鶴の文章は捨吉も争って買って開けて見たものだ。何という汚れた書だろう。そう考えた彼は「一代女」を引割いて捨てた話をして、酷く足立に笑われた。

捨吉のモデルは藤村。

（5）「『好色五人女』巻四」（信多純一著　『好色一代男の研究』岩波書店）

（6）伊東一夫編『島崎藤村事典』（明治書院）

（7）松原秀江「『たけくらべ』の中の「子どもたちの時間」―信如と美登利の恋―」（大手前大学論集　第九号）

（8）藪禎子「藤村と樋口一葉」（島崎藤村学会編『論集　島崎藤村』おうふう）

（9）国文学研究資料館編　高木俊輔著『セミナー「原典を読む」11『夜明け前』の世界「大黒屋日記」を読む』（平凡社）

（10）松原秀江「江戸時代における女性の文学的教養について―狭義の頭書形式の版本を中心に―」（『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』和泉書店）

（11）島崎藤村コレクション第三巻『藤村をめぐる女性たち』（伊東一夫著　国書刊行会）

（12）星野天知著　『黙歩七十年』（明治文学全集98『明治文学回顧録集㈠』筑摩書房）

（13）渡辺京二著　『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）

（14）佐伯順子著　『「色」と「愛」の比較文化史』（岩波書店）

（15）江戸時代まで、花といえば桜だったが、明治になって、西洋の文物がもてはやされるようになると、同じバラ科の花でも、薔薇が珍重された。

（16）日本国語大辞典第二版（小学館）

(17) 藤村の初恋の年は、『生ひ立ちの記―或る婦人に興ふる手紙―』では八歳、『破戒』（第九章）では九歳になっている。
(18) 『島崎藤村『若菜集』の世界』（萬葉堂出版）
(19) 明治二十六年十一月、関西漂泊の旅から帰った藤村は、入水自殺を覚悟するが果せなかった。
(20) 『旧約新約聖書大事典』（教文館）
(21) 『聖書　和英対照』（日本聖書協会）
(22) 吉田精一著作集　第六巻『島崎藤村』（桜楓社）
(23) 寿貞にかかわることについては、私見（「もう一つの心の世界―『おくのほそ道』と寿貞・冬室宗幻―」　大手前大学人文学部論集　第六号）もあるが、今はふれない。

〈付記〉本稿は大手前大学での講義、「日本の名作を読む」がきっかけになりできました。月曜日一時限の授業であるにもかかわらず、熱心に受講してくれた多くの学生の皆さんにお礼申します。ありがとう。また御多忙の中、授業参観して下さった小林宣之先生には、心より厚くお礼申し上げます。